

シェイクスピア戯曲編集のプラクシス

——大修館シェイクスピア双書『冬物語』の編集作業を中心に

井出 新

1. 大修館シェイクスピア双書の背景

大修館シェイクスピア双書・第一集（全12巻）の刊行が始まったのは1987年4月。その頃はシェイクスピア講読の授業を行う大学もまだ多く、双書は充実した日本語による解説と注釈、さらには手頃な値段という点においても、講読の授業で原典に親しむ学生の助けとなり、研究者や教員にも欠かせないツールとなった。そうした時代に比べれば、経済性偏重の教育施／失策の影響もあって、シェイクスピア講読の科目を有する大学は数えるほどになったが、双書が役割を終えたわけでは全くなかった。そのことは発行部数からもよくわかる。大修館書店編集部によれば、2010年代になっても双書のほとんどは継続的に増刷を続けており、例えば『ロミオとジュリエット』の総発行部数は15,000部に届く勢いとのこと。古典英文学の注釈書としてはかなりの部数と言える。

これは大学の教員や学生のみならず、多くの一般読者にも双書が届いていることの証左であろう。実際、通信教育、生涯学習講座、地域のカルチャー・センター、読書会や勉強会でシェイクスピアの原典に赴く人は少なくない。そういう読者に双書が選ばれているのだとすれば、第一期編集委員会の目指した理念はこれまである程度好意的に受け取られてきたと考えられる。その理念とは、原文のシェイクスピアを出来るだけ多くの人に親しみやすいものにすること。とは言え、入門的に平易に書き直したりダイジェスト版にしたりするのではなく、最新の研究成果に基づいた解説や注釈により、原文を余すところなく読み解けるようにすること。そのために対注形式を取り、見開き二ページで原文と注釈を収めて読みやすさを重視すること。後注や参考文献により学問的な質を高く保ちつつ、シェイクスピアの台詞や研究の面白さを深く理解できるようにすること。こうした第一期の理念は、日本の読者に古典作品を原文で親しんでもらうために、今も重要な指針となっていると言えるし、第二集（全8巻）においても引き継がれている。また、表記の仕方などを除いて、厳密な統一事項や決まりなどは設けず、編集者の個性を十分に発揮する点も第一期と同様である。

その一方で、第二集には独自の重要な刷新がある。実は、第一集においては、新書誌学的方法論に基づき折衷主義的な校訂を施したPeter Alexanderの*The Complete Works of William Shakespeare* (1951)のテキストが、底本としてほとんどそのまま用いられている。つまり初期版本の本文の異同を解釈してAlexanderがシェイクスピアの自筆原稿に近いと思われる本文を編纂して組み上げたわけだが、当時と比べれば近年の本文研究は大きく変貌している。作者の意図は本文再生産において必ずしも可能であるとは言えなくなったし、本文の本質とは不確定性にこ

そあるというのが本文研究・編纂の基礎となったからだ¹。その点でAlexander版は必ずしも使いやすいものではない。

そこで第二集では、编者一人一人が初期版本の性質を見極めた上で、そこからテキストを立ち上げ、様々な本文の読みを吟味しつつ編集作業を行う方が、(编者の負担は増すものの)意義ある取り組みになるという、そうした考え方に基づいて大きく舵を切り、各自で本文を組み上げることになった。これによって编者に多大な労力と負担がかかるだけでなく、本文に関する厄介な註が増え、それにしたがって紙面も増えるため、大修館書店編集部にとってはあまり嬉しくない事態が生じるが、その一方で、Alexander版の版權を購入する必要がなくなったために、書店の財政的負担が軽減されるだけでなく、编者としては最新の研究成果を生かしたテキストを作り上げることができるようになるという利点も生じた。

こうしてそれぞれの作品により、编者の本文編纂作業の実践方法は多かれ少なかれ異なり、苦勞の質や問題点の所在も違ってくることになる。そこで本稿では、『冬物語』の本文編纂作業において浮上してきた問題について具体的に取り扱い、その問題をどのように解釈した上で本文編纂作業を行ったかを見ていきたい。

2. 劇作家シェイクスピアの痕跡

『冬物語』に限らず、シェイクスピアの作品はことごとく自筆原稿が一枚も残っていない。なぜかと言えば、劇作家の自筆原稿を、劇団も書籍商も、さらには劇作家自身も、さほど価値あるものと見なさなかったからだ。中央政府や地方自治体の会議録、貴族や政治家の書簡、裁判記録、利益共同体の記録簿など、保管しないと支障をきたすテキストは大切に扱われるので、今でも残っているものが多い。一方、芝居は熊いじめやアクロバットなど大衆娯楽と同列の「気晴らし」であり、劇作家が台本を書き、劇団に売ってしまえば、台本に関する権利を失い、台本は劇団の所有物となる。その劇団にしても、作品を上演して利潤を稼げればそれでよし、しばらく上演して芝居の集客力と商品価値が落ちれば、劇団は余計な原稿を書類保管室に置いておく必要はない。むしろ原稿は書籍商に売り渡してしまったほうが、利益を確保できるだけでなく、印刷本を劇団員の参照する台本として、大衆向けの宣伝代わりとして、使うこともできた。そういうわけでシェイクスピアの自筆原稿が残っていない今、私たちの知る『冬物語』は、上演後に出版された印刷本に依拠している。つまりファースト・フォリオ——シェイクスピアの死後1623年に判型の大きなで出版された『シェイクスピア氏の戯曲作品集』(以下F1と略記)——に収められたテキストである。F1以前に四折本などの形で『冬物語』が出版されることはなかったので、F1を底本として、若干の修正が施されている1632年の第二・二折本(F2)、1663-4年出版の第三・二折本(F3)を参照しながら、本文編纂作業を行うこととなる。

¹ この点に関しては金子雄司「Not for All Time, but of an Age —シェイクスピア本文研究・編纂理論の一世紀—」『中央大学人文科学研究紀要』78(2014)1-22を参照。

F1の『冬物語』を組版する際出版者ウィリアム・ジャガードの植字工が用いていたと思われる原稿に関しては、Howard-Hillによる非常に詳細な研究が行われている。²それに拠れば、シェイクスピアの劇団に雇われていた筆耕レイフ・クレインによって清書された手稿を『冬物語』の組版に用いた可能性が高い。クレインは法律関係文書を専門とする筆耕だったが、ベン・ジョンソンの仮面劇『快樂と美徳の和解』(*Pleasure Reconciled to Virtue*, 1618年上演)の筆写を契機に、演劇テキストの筆写も手がけるようになった人物であるが、おそらくそのクレインがシェイクスピアの自筆原稿、もしくは他の筆耕による清書原稿を用いて、F1に収録された『冬物語』出版のための手稿を準備したと考えられる。

シェイクスピアの芝居の清書手稿はもちろん残存していないが、他の劇作家の作品でクレインが書き写した手稿がいくつか残されているため、彼自身の筆写の「癖」についてはある程度うかがい知ることができる。総じて言えば、クレインの手稿は、彼自身に特徴的な書式、句読法、綴字法、語法、話者表示やト書きの編集方法に基づいて筆写されており、『冬物語』もクレインのそうした癖を明らかに痕跡として留めている。³それが何を意味するかといえば、クレインの手稿には(たとえ彼がシェイクスピアの自筆原稿を筆写していたとしても)、シェイクスピア自身の句読法、綴字法、語法、話者表示などに関する「癖」は殆ど留められていないということだ。つまり『冬物語』のテキストは、それが版本として出版された時にはすでに、クレインによる編集がなされたものだったということになる。

したがって大修館シェイクスピア双書の『冬物語』では、F1のテキストを底本としつつも、現代的な綴り字を採用し、日本人にとって意味の咀嚼のしやすさを重視して句読点を施し、ト書きはF1のそれを補足しつつ、読者が舞台をイメージしやすい箇所に配置することとした。そしてF1のテキストが明らかに乱れている箇所(意味の通らない箇所)については、F2やF3の修正方法や、これまでの編纂者たちが採ってきた校訂方法を参考にしつつ、可能な限りF1の読みを生かす形で本文校訂を行うと同時に、校訂が必要な箇所にはテキストに関する注釈を付して、読者の注意を喚起するという方法を採用することになる。しかしながら、『冬物語』の底本が唯一F1しかないために、『リチャード二世』編纂の場合のようにF1以前に出版されていた四折本のテキストを参照するようなことができず、苦渋の選択を迫られる場面が少なくない。次にそうした本文編纂のプラクシスに関する具体例をみていこう。

3. 五幕一場の難問

本文の意味を確定するために編者が選択を迫られる難問が『冬物語』にはいくつか存在する。五幕一場はまさにその例である。この場面は、悔い改めたシチリ

² T. H. Howard-Hill, *Ralph Crane and Some Shakespeare First Folio Comedies* (Charlottesville: University Press of Virginia, 1972).

³ Howard-Hill, pp. 128–33.

ア王レオンティーズが侍女のポーライナに対して、「自分は再婚しない」と誓ってみせるところである。亡き妻ハーマイオニより劣った新妻を迎えて手厚く遇すれば、ハーマイオニの聖なる魂が再び身体をまとって、この世という舞台に現れ「何で私にそんなひどいことを？」と非難しはじめるだろう、とレオンティーズは言うのだが、困ったことにF1ではこの箇所の意味がまったく通っていない。F1の本文は次の通り。

Leo. Thou speak'st truth:
No more such Wiues, therefore no Wife: one worse,
And better vs'd, would make her Sainted Spirit
Againe possesse her Corps, and on this Stage
(Where we Offendors now appeare) Soule-vest,
And begin, why to me?⁴

動詞“appear”は前の行の“would make her [...] possess”と並列して、“make her [...] possesse [and] appear”となる動詞のはずだが、F1やF2では丸括弧の中にしまわれており、“on this stage”以降のテキストが乱れているように思える。ただ、本文が意味するところは比較的明らかで、「我々罪人たちが存在する[この世界という]舞台に、肉体をまとった彼女の霊を現れさせることになるだろう」ということだろう。そこで編集者が本文の意味を確定するために、テキストをいじる必要が出てくる。これまでの編者の解決方法は少なくとも四通り存在する。

(1) “where we Offendors now”の間にbe動詞（「存在している」）を補って考える、つまり“(Where we Offendors [are] now)”と解釈し、“appeare”を丸括弧の外に出して考える。

(2) もしくは“appeare”が“her Sainted Spirit”だけでなく“we”の動詞になっていると考える。つまり“make her Sainted Spirit [...] appeare (where we offenders now [appear])”と考える。

(3) 筆耕もしくは植字工が“Where”を“were”と読み間違えたと考えて“were we Offendors now”と修正し、「もし私[尊厳の複数]が今[再婚することで]道を踏み外す者になるなら」と仮定節にとる。

(4) 筆耕もしくは植字工が本来“move”と書かれていたものを“now”と読み間違えたとして解釈する。つまり“(where we Offendors move)”としてカッコにいれ、

⁴ Charlton Hinman and Peter W. M. Blayney, intro. *The Norton Facsimile, The First Folio of Shakespeare* (New York: W. W. Norton, 1996), p. 316. F1からの引用はこの版に拠る。

appear をカッコの外に出す。

以上のように修正がこれまで試みられてきたわけだが、どれも決定的な読みとはなっておらず、結局は編集者の判断に委ねられることになる。大修館シェイクスピア双書『冬物語』では、一六世紀のイングランドで後半に使われていた筆記体、すなわち「秘書体」^{セクレタリーハンド}にしばしば見られる now と move の形の類似性を重要視し、(4)の解釈にそって本文を組み立てている。ただ、この箇所の場合は、F1 だけから正解を出すことは極めて難しいため、できる限り他の解釈を紹介しつつ、判断は読者に委ねるという方法を採らざるを得ない。编者としてはもどかしさの残る難問である。

4. 「沈黙」はト書きか？

三幕二場でハーマイオニが公開法廷に引き出され、自らの名誉を守るために申し開きを行う場面。ハーマイオニの罪状を述べる役人が、登場人物及び観客に向かって語り出す。F1におけるこの箇所は以下の通りである。

Officer. It is his Highnesse pleasure, that the Queene
Appere in person, here in Court. *Silence.*

ここで注目したいのは、「沈黙」(silence)がイタリックスで表示され、独立したト書きのような形になっている点である。これは役人の「静粛に」という台詞なのか、それとも「沈黙」というト書きなのか？ちなみにF2でこの箇所は、以下のように加筆されている。

Officer. It is his Highnesse pleasure, that the Queene
Appere in person, here in Court. *Silence. Enter*

この場合の“Enter”は、すなわち“Enter [Hermione]”のことであり、F2の编者はどうかSilenceをト書きだと考えていただけでなく、さらに“Enter [Hermione]”というト書きを付け加えたということになる。したがって1842年の編纂者ジェレミー・コリアの*The Works of William Shakespeare* (1842)以来、F2に則ってこれをト書きとして扱う编者が多くいた。

しかしながらト書きとして“Silence”を使用した例は、シェイクスピアの作品にも同時代人劇作家の作品にも全く見られない。もちろん手塚治虫が静かさの表現として漫画に「シーン」を持ち込んだように、シェイクスピアが新しい“silence”というト書きを生み出したと考えることも可能だが、ここでは筆耕レイフ・クレインの手が入っていることを思い出すべきだろう。

Howard-Hillはクレインが所々、台詞で強調したい部分に、イタリックスを使用する癖があることを指摘している。つまり“*Silence*”は役人が大きな声で叫ぶ台

詞として解釈すべきとの見方も根強い。最初に“*Silence*”をト書きではなく役人の台詞として解釈したのは1709年に Nicholas Rowe が編纂した全集だが、その後も John Dover Wilson をはじめとする多くの編纂者が、この解釈を採用してきた。大修館シェイクスピア双書『冬物語』も F1 を底本としているわけだが、この部分ではテキストに編集を施し、“*Silence*”をト書きではなく台詞とする解釈を採用している。

ここまでは編集者とテキストとの葛藤であるが、ここから編者自身の葛藤、もしくは編者と大修館双書との葛藤が始まる。この編纂を行うとなれば、ここにはテキスト註として、例えば New Cambridge Shakespeare で表記されているような形での註が記されるべきだろう。

Silence!] Rowe (*subst[antively].*); *in italics and set as SD F*

ただこうしたテキスト註を付しても、このような表記方法に馴染みのない日本人読者の大半には、あまり意味のある注釈とは言えない。しかも大修館シェイクスピア双書の場合、第一集が Alexander 版のテキストをそのまま用いたこともあり、こうしたテキスト註は付けてこなかったし、第二集でも異同の多い『リチャード二世』のような版本を除いては、こうした形のテキスト註は付けてはいない。ただ当然のことながら、編者としては、この部分にテキストに関する注釈をつける必要はあるわけで、最終的な決断としては次のような注釈を付けることにした。

F1では余白にイタリックで *Silence* と印刷されているため、ト書きの可能性もあるものの、ト書きとして *silence* を使用した例はシェイクスピアの作品にも当時の他の作品にも見られないため、Officer の台詞の一部として解釈した方がよいだろう。⁵

私としては Nicholas Rowe が最初に F1 のト書きを台詞として解釈したという情報よりも、*silence* がト書きで使われたためしがないという情報の方が読者には重要と思えたため、ロウが最初の提案者であるという事実は記さなかったが、その結果、この本文異同に関する注 (textual apparatus) は右頁の注解と区別せずに混在してしまい、F1 とは相違する箇所をチェックしたいという専門的な読者には、不便を感じるものになってしまった。つまり、どのような読者を想定するかによって、どのような情報を記すか、それをどれくらい詳しく書くか、ということが、大修館シェイクスピア双書のような日本人読者向けの版本では悩みの種になるのだ。

5. 結びに代えて

この問題を解決するための簡便な方法は何かといえば、New Penguin Shakespeare や New Folger Shakespeare Library などのように、本文の最後に“Textual

⁵ 井出新編注『大修館シェイクスピア双書第二集 冬物語』（大修館書店 2023 年）p. 149.

Notes”として、こうしたF1との異同すべてを上のような形で列記すれば一番良いと思われる。したがって、学術的ツールとしてのシェイクスピア双書を想定すれば、今後、ページ数が増えて、価格設定が高くなったとしても、そのような巻末の“Textual Notes”をシリーズの言わば「鉄板」として設けるべきだろう。このことを第三集では（将来刊行されるのであればの話だが）是非考慮してもらいたい。

ただその一方で、今回、校訂本編集に関わってみて分かったことだが、この双書シリーズを用いているのはおそらく、F1でテキストがどう表記されているかを確認したい専門家ではないということだ。シェイクスピア研究者が論文執筆で用いているのはArden版やOxford版であって、大修館シェイクスピア双書ではないだろう。むしろ大学の学部学生や（殊勝な心構えの）高校生、あるいは通信教育、生涯学習、カルチャー・センター、読書会に集う人々こそ、大修館双書を必要としている読者であることは比較的明らかであり、そうした日本人読者、そしてこの双書シリーズが実際に使われている現場を想定すれば、果たして編集者がF1にどのように関わったのかという痕跡をすべて詳らかにする学問的な“Textual Notes”が絶対に必要であると俄には決断することは私にはできなかった。確かに専門家から「これは双書の不備だ」と言われなかったためのアリバイ作りとしては必要ではあるものの、一般読者からそれが本当に必要とされているのかどうか、それは編者の頭を悩ませる非常に難しい問題だったし、大修館シェイクスピア双書『冬物語』のテキストの注は、そうした編者の迷いが如実に表れてしまった見本ということになるだろう。

したがって注釈を付けていく作業で優先されたのは、文法や意味、表現、背景、言葉遊びの説明であった。当時の文化的背景に関する説明は、読者がさらに理解を深められるよう、一次史料をそのまま引用することすらあった。日本人読者と現場を想定した場合、そして本の価格を抑えるためにすべてを優先することができない場合、編者はテキストの意味を語学的に理解することができるよう、あるいは英語や文化の学習に結びつけられるようシフトせざるを得なかったし、そういう点で本書は語学・文化に重点を置いた、ある意味で偏りのあるものになってしまったと言って良い。

こうして編者が何を優先するかが、双書ひとつひとつに悪く言えば偏りを、良く言えば個性を与えることになるのだろう。限られた紙面やページ数の中で、何を優先してどんな読者に届けるか、そこに個性が顕現するわけで、それが大修館シェイクスピア双書『冬物語』の個性だったと思われる。原文と対注で読める大修館のシェイクスピア双書という現代日本に類い稀な企画は、どのような読者を想定するかというところにすべてがかかっている。そうした読者の最大公約数的な校訂版テキストを目指せば、おのずと日本語による原文と対注の校訂版のあり方は決まってくるのではないかと思えるのだ。

The Praxis of Editing Shakespeare Plays:
On the Editing Process of *The Winter's Tale* in the
Taishukan Shakespeare Series

Arata Ide

The Taishukan Shakespeare Series is guided by the principle of making Shakespeare's original texts accessible to as many Japanese readers as possible. However, this does not involve simplifying the texts for beginners or creating abridged versions. Rather, it involves enabling readers to fully comprehend the original texts through annotations and commentary based on the latest research. This report addresses the issues that arose during the editing of *The Winter's Tale* for Japanese readers, examining how these were resolved or not.